

オーディオ実験室収載

モーツアルト盤を聴く(102)(HP 収載) —最新アナログシステムでの試聴(102)—

1. 始めに

前報(101)に引き続き、新たに入手したモーツアルトのアナログ盤を最新アナログシステムで試聴していきます。

2. モーツアルトのアナログ盤の試聴方法

モーツアルトのアナログ盤の由来およびアナログシステムの状況は前報(1)のとおりです。今回は、LINN LP-12を使用します。

試聴システムは仮想アースに加えて、スピーカーアキュライザーSPA-7が加わっています。

音源は、新たに入手したモーツアルトのアナログ盤を使用していきますが、今回は器楽協奏曲です。

PHILIPS 20PC343

モーツアルト ホルン協奏曲 1番～4番

ヘルマン・バウマン (ホルン)

ピンカス・ズカーマン指揮セントポール室内管弦楽団

3. モーツアルトのアナログ盤の試聴結果

PHILIPS 盤ということで、RIAA、正相、第4時定数 High で聴いていきました。

モーツアルトのホルン協奏曲の全曲が収納されていますが、収納は3番→2番→1番→4番の順です。

曲自体の印象は、前報(101)と同様です。

ホルン奏者は前報(101)と同様ですが、盤質がよく、ホルンの音が朗々と鳴る様子が冴えています。ズカーマン指揮セントポール室内管弦楽団の演奏も前報(101)より盤質が良いので生き生きとしています。

4. まとめ

ターンテーブルアキュライザー、ダンパーフレーク、Crystal E、スピーカーアキュライザーなどの総合的な効果により、ホルン協奏曲の全曲の特徴がよく把握できます。

以上/